

# 「敵はロシア」

——中央ユーラシア・テュルクの伝承に現れるロシア

坂井弘紀

## ——要旨

ロシアの歴史や文化にはテュルクの要素が少なくない。長い歴史の中で、ロシアと中央ユーラシアのテュルクとの関係は密接なものであった。現在のロシアにおいてもそれは同様である。テュルクの人々は古来、豊かな口頭伝承の伝統を発展させてきたが、英雄叙事詩や伝説などの口碑にもロシアは現れる。16世紀後半にはじまる、ロシアの領土拡張と異民族支配を反映し、テュルクの伝承にはロシアとの戦いが描かれてきた。ロシアの征服の様子や敵ロシアと戦う勇者の姿が歌われてきたのである。「帝国」への第一歩となるカザン征服は英雄叙事詩『チョラ・バトゥル』に描かれ、カザン・ハン国やアストラハン・ハン国、シビル・ハン国を併合する経緯は共通する「畏」によって印象的に伝えられる。プガチョフの反乱をはじめとする反ロシア闘争や第一次世界大戦時の強制徴用についても詩人たちは語ってきた。それらは、中央ユーラシア・テュルクの人々の側から見たロシア史でもある。

ロシア<sup>(1)</sup>は広い。世界一の面積である。これは1552年のカザン征服以降の拡大政策の結果であった。ソビエト連邦を継承したロシア連邦には21の共和国<sup>(2)</sup>があり、ロシア人のほかに200近い民族を擁する多民族国家である。ロシアにおいてテュルクの存在は大きい。ロシア最大の面積をもつサハ共和国の基幹民族であるサハ人や、ロシア人に次いでロシア連邦で二番目の人口数であるタタール人はテュルク系（トルコ系）の民族である。テュルクの存在はロシアの歴史においても大きかった。

本稿では、中央ユーラシアのテュルク系民族のあいだに語り伝えられてきた英雄叙事詩や伝説などの口頭伝承にロシアがどのように登場するかを見ていくことで、ロシアにたいするテュルクの人々の視線を探っていきたい。それはまたテュルクの側から見たロシア史でもある。

## 1. ロシアの中のテュルク

ロシアの歴史は、ヴァリャーグ（ヴァイキング）が治めたルーシにさかのぼる。ロシア

という名称（ルーシの国）もこのルーシに由来する。ロシア最古の年代記『ロシア原初年代記』には、ヴァリャーグの頭領リユーリクが862年頃に建国したと記される。これがリユーリク朝のはじまりである。現在のウクライナ首都キエフを都としていたためキエフ・ルーシと呼ばれるこの国の南方の草原地帯には、テュルク系のハザル・カガン国が存在していた。ルーシの国家建設にはハザルのカガン<sup>(3)</sup>（君主）が関与したともいわれ、ロシアは建国の最初期からテュルクの影響を受けた国だったといえる<sup>(4)</sup>。ルーシについて、10世紀にバグダードからヴォルガ地方を旅したイブン・ファドラーンは「彼らこそは、アッラーの創造せられたものの中で、最も不潔な人たちであり、いつも大便や小便から逃れられず、(中略) 食事で彼らの手を洗うこともな」<sup>(5)</sup>いと記している。当時のムスリムの目には「未開・野蛮」と映ったようだ。キエフ・ルーシは1237年からのモンゴルの攻撃により滅亡し、ルーシはモンゴル（ジョチ・ウルス＝「キプチャク・ハン国」）の支配下に入り、ジョチ・ウルスはルーシを間接統治のかたちで治めた<sup>(6)</sup>。ジョチ・ウルスは、キプチャク<sup>(7)</sup>などテュルク系の人々を吸収・内包した帝国であった<sup>(8)</sup>。ジョチ・ウルスの支配層のモンゴル人は少数であり、やがてテュルク諸集団に同化し、またイスラーム化していった。モンゴルのもとロシアに攻め込んだテュルクの人々は、ロシア人から「タタール人」と呼ばれるようになった。モンゴル帝国とその継承諸政権下で、モンゴル人および非テュルク系先住諸集団はテュルク化し、テュルク世界が拡大した。

ロシア語に入ったテュルク語は数多い。たとえば、馬 лошадь、金銭 деньги、主人 хозяин、鉛筆 карандаш、同志 товарищ、税関 таможня、コップ стакан、タイガ тайгаなどはテュルクの言葉に由来すると考えられる<sup>(9)</sup>。金銭 деньги の語源であるテンゲは現在でもカザフスタンの通貨単位として用いられており、主人 хозяин の語源である「ホジャ」は著名なトリックスターのホジャ・ナスレディンなど人名にも用いられる。鉛筆 карандаш は「黒い石」の意であろう。ソビエト時代を象徴するような「同志 товарищ」という語は「商品+仲間」（商売仲間）からなる合成語であり<sup>(10)</sup>、この、ソ連を象徴する言葉でさえもテュルクに源を発していることは非常に興味深い。税関を示す таможня のなかには、遊牧民が自分の属する一族を表す「家紋」の一種である「タムガ」が見いだせる。

ロシアの姓にもテュルク由来のものは少なくない。ロシア貴族であった名家ウルソフ家やユスポフ家はノガイ・オルダの有力者（ウルス、ユスフ）の子孫であるためわかりやすいが、意外に思える例もある。『獵人日記』や『初恋』で有名なイヴァン・ツルゲーネフの姓の語源は「速い、軽快な」を意味するアルタイ語 түрген やハカス語 түргүн に見出せる<sup>(11)</sup>。ナポレオンのフランス軍の攻撃を撃退した著名な将軍ミハイル・クトゥゾフの姓はテュルク系の「荒れ狂った」という意味にかかわる「クトゥズ」を、大粛清で命を落としたソ連邦元帥ミハイル・トゥハチェフスキーの姓はテュルク系の「トゥガシュ（旗を持つ者）」が起源と考えられる<sup>(12)</sup>。さらに、18世紀のロシア海軍大将フォードル・ウシャコフのウシャコフ（「小さい、背の低い」）、小説家セルゲイ・アクサコフのアクサコフ（「足の不自由な」）、著名な歴史家、小説家ニコライ・カラムジンのカラムジン（「黒い」「貴人」）、7番目<sup>(13)</sup>に多

いロシア人の姓コズロフ（「子羊」）など、ロシアの姓にテュルク起源は珍しくない<sup>(14)</sup>。

ロシアの地名にもテュルクの言葉を語源とするものが多い。現在タタルスタン共和国の首都であるカザンはテュルク語で「大鍋」を意味する。サラトフは「黄色い山」を意味するサル・タウから、ヴォルゴグラードの旧名ツァリツィンは「黄色い川」を意味するサル・スーからと、いずれもテュルク語起源である。現在ロシアで「母なるヴォルガ」と呼ばれるヴォルガ川は、かつてはエディルヤイテルと呼ばれていた。この流域は、テュルク系やフィン・ウゴル系など非ロシア系の人々が多く居住した地域で、ヴォルガ川流域の地名はテュルク語起源であることが多い。もともと「よそ様」の地であったために、これをヴォルガの異名で呼び、ロシア民謡などでことさら「母なるヴォルガ」「ロシアのヴォルガ」と強調するのである<sup>(15)</sup>。

こうしたロシア語の単語や地名のみならず、たとえば、ロシア文化の象徴のひとつでもある弦楽器バラライカももともとは、現在のカザフやバシコルト（バシキール）などの民族楽器であるドンブラに由来すると考えられる<sup>(16)</sup>。ロシアの楽器ドムラにいたってはその名称もドンブラから来ていることを明示する。バラライカという名称も、すでに1770年に出版されたロシア・アカデミー辞典には「タタール語。フレットのついた小型の二弦楽器」とタタール由来とされていた<sup>(17)</sup>。18世紀のバラライカは、円形や三角形の胴、弦は2弦であったとのことだが<sup>(18)</sup>、この特徴はドンブラに完全にあてはまる。

フォークロアにおいても、テュルクとロシアのフォークロアにおける共通点は多い。たとえば、テュルクのジャルマウズとロシアのバーバ・ヤガー、テュルクのシュルガンとロシアのシュリクンなど超自然的存在のキャラクターにも相互の共通性が高い<sup>(19)</sup>。ロシアの英雄叙事詩の勇者たち、スヴァトゴールヤイリヤ・ムーロメツ、ドブリニャ・ニキーティチ、アリョーシャ・ポポーヴィチなどを指す「ボガトウイリ Богатырь（英雄）」という言葉ももともとはテュルク語であった<sup>(20)</sup>。彼らの戦う敵がテュルク系のハザルやペチェネグ、キプチャク、ジョチ・ウルスと考えられることをあわせると実に興味深いことである。

なお、ロシアを印象的に象徴することのあるコサックも、もともとは草原地域を本拠地とした、多様な民族からなる集団で、コサックという言葉自体も「自由人、放浪者」を意味するテュルク語を起源としている。ロシアの意味でコサック казак をもちいることもある。「独立不羈の民」であった彼らもやがて帝政ロシアの中に取り込まれて、国境の警備や領土拡大、反乱鎮圧の任を担うようになった。

さて、現在でこそ世界屈指の大都市として知られるモスクワであるが、その発展にはジョチ・ウルスの存在があった。モスクワはジョチ・ウルスの支配下で徴税の任を請け負って、経済力を高めながら急速に発展し、周辺の諸公国を併合して領域を拡大していったからである。『キエフ年代記』（イパーチー年代記）は、1147年にモスクワなる小村落で諸公の会談があったことを伝える<sup>(21)</sup>。これがモスクワの名が文献に現れた最初の例である。この町はモスクワ川に由来し、バルト・スラヴの言葉で「沼地の、ぬかるみの多い川」の意味であると考えられる<sup>(22)</sup>。ジョチ・ウルス支配下でモスクワ諸公は「タタール」の支配に全面

的に服し、ひたすらハンの恩寵を得ることに腐心し<sup>(23)</sup>、1328年にモスクワ公イヴァン1世はウズベク・ハンから大公の位を授けられる。リトアニアが勢力を伸ばし始めると、ジョチ・ウルスはルーシにリトアニアを抑える役割を求め、モスクワ諸公に徴税の任務を委ねるようになった。1360年代にジョチ・ウルスが安定を欠くようになるまで、モスクワはハンの支配のもとそれぞれの利益を求めたと考えられる<sup>(24)</sup>。分裂傾向にあったジョチ・ウルスはトクタミシュ・ハンによって再統一される。トクタミシュは1382年に軍勢を率いてモスクワを占領し、また、1408年にはノガイ・オルダの創始者であるエディゲがモスクワを攻撃し、ひと月におよぶ包囲のあと、この地を荒廃させ、捕虜を連れて退却した<sup>(25)</sup>。

モスクワ大公国は1476年頃に貢税の支払いを停止し、ロシアでは、80年の「ウグラ河畔の対峙」によりモンゴルに支配された時代「タタールのくびき」<sup>(26)</sup>が終焉したとされる。だが、モスクワ大公国はその後もジョチ・ウルスやクリミア・ハン国に貢納を支払っていた<sup>(27)</sup>。先にも述べたように、「タタール」はもともとモンゴルを指していたが、実際にはテュルクの人々を意味している。現在のロシア各地に居住するタタール人（クリミア・タタール人やシベリア・タタール人なども含む）はテュルク系民族である。「ロシア人、一皮むけばタタール人」なる侮蔑的な言い草もあるが、そこにはロシア人の「アジア性」や「後進性」を強調したい心情が映っているのだろう。ロシアが専制国家となり、軍事技術や行政制度においてモンゴル統治の大きな影響を受けたことは確かであるが、ロシアの歴史研究においてこのことは認められず、否定的な評価がなされることが一般的であった。だが、ルーシがモンゴルから「支配システムを学び、その後モスクワ国家からロシア帝国へと国家形成をして行くなかで、自らモンゴルの専制体制を築いていった」<sup>(28)</sup>との指摘は重要である。

ヌルスルタン（1451-1519）という王女がいた。ノガイ・オルダの創始者エディゲの孫テミルの娘である。その生涯は、この時代のノガイ・オルダ、カザン・ハン国、クリミア・ハン国、そしてモスクワ大公国の複雑な相互関係をよく示している。彼女は、まずカザン・ハン、イブラヒム（在位1467-79年）に嫁ぐが、彼が殺害されると、次にクリミア・ハン国のハン、メングリ・ギレイ（在位1468-1515年。この間中断があり三次の即位）に嫁ぐ。彼女はクリミア・ハン国における政策に関与する一方、モスクワとの友好関係を構築し、イヴァン3世、ヴァシーリー3世父子との親交を深める。また彼女は、イヴァン3世の助力を得て、二人の息子をカザン・ハンの玉座に就かせ、カザン・ハン国の内政にも深く関わった。彼女は息子アブドゥッラティフのクリミアでの立場が危うくなったときには、カザンではなくモスクワのイヴァン3世のもとに息子を避難させるほど、彼を信頼していた。こうした宗教や国家の違いを超えた濃密な人的交流があったのである<sup>(29)</sup>。だがこの時代、キプチャク草原の諸政権は同盟と離反を繰り返していた。ヌルスルタンの夫メングリ・ギレイは、モスクワとの同盟関係を維持しつつ、1475年オスマン帝国への臣従を誓うことで、クリミアとモスクワとの関係が悪化したため、1517年、ヌルスルタンはヴァシーリー3世に高価な贈り物を贈ることを止めた。翌年、モスクワの実質的な人質となった愛息アブ

ドゥラティフはモスクワで死去した<sup>(30)</sup>。

16世紀前半、カザン・ハン国やノガイ・オルダなどの諸政権はまだモスクワ大公国と対等な関係にあった。ノガイ・オルダの有力者ユスフが1549年にロシアに送った親書には次のような文言がある。「われらが先祖エディゲ公とあなたの先祖ワシーリー公からの友情と親交は変わることがなかった。(中略) ムスリムの統治者がキリスト教徒の統治者と友情や親交について語ったこと、人々はこの言葉を守り、死ぬまで友愛の中にあるであろう。これこそ、善良なる名誉なのである」<sup>(31)</sup>。ノガイ側はロシアと自らが対等な関係にあり、ムスリムとキリスト教徒との共存と親睦を「善良なる名誉」であるとしていたのである。そこに、後代にみられる支配・被支配の関係は感じられない。

## 2. ロシアの征服

すでにウラル以東、マンシ人の住む地に進出していたノヴゴロド公国を、1478年にモスクワ大公イヴァン3世が併合したことで、モスクワ大公国のウラルを越えての東進が始まる。16世紀にはいると、モスクワ大公国の本格的な領土拡張がはじまり、のちのロシア帝国の礎となる。1547年にイヴァン4世はツァーリ<sup>(32)</sup>、すなわちローマ帝国を継承する「皇帝」の称号を公式に得て、それまでのモスクワ大公国はロシア・ツァーリ国となった。これ以後、その帝國的志向を推進すべく経済規模に見合わないほどに軍事力が強化され、カザン・ハン国やアストラハン・ハン国、シビル・ハン国を併合していく<sup>(33)</sup>。

### カザン征服

モスクワ大公国がカザン・ハン国を征服したことは、ロシアの歴史、ひいては世界の歴史においてきわめて重要なエポックであった。「ロシア国家のユーラシア化、また帝国への道がここにはじまった」<sup>(34)</sup>のである。これ以後、ロシアは本格的な多民族国家への道を歩みだす。ロシアのカザン攻略については、英雄叙事詩『チョラ・バトゥル』がテュルク諸民族にその様子を伝えている。カザンは当時オスマン帝国の都であったイスタンブルと比肩される。

イスタンブルとカザンの二都市は、古よりその名が知られていた。

ムスリムの支えであった。

古くから無法者がカザンを、ペテルブルグやモスクワと同列に並べたがっていた。

宝のカザンを、このカザンを異教徒たちの手から取り戻せれば。

私の鎧を持ってこい、それを身にまとおう。

ここにのさばる異教徒を、神に祈って攻撃しよう。<sup>(35)</sup>

「ムスリムの支え」であるカザンを、カザン攻略当時まだ建設されていないペテルブル

グに加えて、ロシアの三大都市のひとつにしようとしているという。ロシア人を「無法者」「異教徒」としていることも注目される。

現在ルーマニアに住むドブルジャ・タタールに伝わるヴァリエーションでは、ロシアと戦ってカザンを死守しようとする勇者チョラの心意気が次のように歌われる。

私がカザンに行くまでは、血を降らさずに雪を降らそう。

私がカザンに着いたらば、雪を降らさず血を降らそう。

私はカザンに攻めに行く。

ロシア Qazaq<sup>(36)</sup> がカザンを取ったとしても、

カザンに残って、勇士になろう。<sup>(37)</sup>

このような気概のチョラにたいして、ツァーリは神に次のように祈った。「異教徒の皇帝は真鍮の偶像に祈りを捧げた。勇士ショラ（チョラ）の魂が龍に飲み込まれるようにと」<sup>(38)</sup>（カザフの叙事詩）。

カザン・タタールに伝わる叙事詩では、カザンを護る勇者チョラがロシアの次のような謀略によって命を落とし、カザンも落ちたという。

ロシア урыс 軍はチュラ（チョラ）・バトゥルを殺す方策が見つからず、占星術師を集めて天球儀を使って占わせ、このチュラ・バトゥルの死の原因は何になるかをさぐった。そこで占星術師は「チュラに美しい少女を送って彼の子を宿させなさい。その子がチュラの死の原因となるであろう」と告げた。將軍たちはとある娘に美しい衣服を着せ、四頭の馬をつけた車に乗せて、そばには下女を置いて、チュラ・バトゥルに与えた。その娘にはこう言い含めてあった。「チュラ・バトゥルの子供を宿して、子が腹を蹴るようになったら、一計を案じてここに逃げて来るのだ」と。チュラはこの娘がたいへん気に入った。その後長い時間が過ぎ、彼女は妊娠した。すると娘は自分の国に逃げ帰り、男の子を産んだ。

ロシア軍のなかに例の娘から生まれたチュラ・バトゥルの子がいた。息子を殺すことができずに時だけが流れ、疲弊した馬はついにイデル川に倒れ、チュラ・バトゥルは川に沈み死んだのであった。<sup>(39)</sup>

クリミア・タタール<sup>(40)</sup>につたわるテキストでは、チョラと戦う、ロシアの戦士となった息子の母はカザン・タタールのテキストとは異なり、カザン・ハンの娘である。

（カザン・ハン国の姫）サルハヌムは真の勇士であるチョラのもとに嫁いだ。しかしその後二人は別れ、サルハヌムは敵側に去った。それから15～20年の時が経って、敵に有名な勇者がいることが知られるようになった。ある日、チョラ・バトゥルはこの

勇者と出会い、二人の勇者は対峙する。どちらも勝てない。チョラは「わが刀でどうしてわが息子を切れようか」と言う。

二人の勇士は戦い合い、一方が一方を崖から投げ飛ばした。チョラが川に沈んだあと、カザンをロシア皇帝 *рус чары* が手にした。<sup>(41)</sup>

16世紀前半のカザン・ハン国はまとまりに欠け、クリミア・ハン国に近い派閥とモスクワ大公国に親しい派閥とに分かれ、互いに反目していた。叙事詩に描かれるカザン・ハン国の姫の裏切りはその状況を反映しているのだろう。

英雄チョラ・バトゥルの物語とは別に、モスクワのカザン攻略について次のようなカザン・タタールの口碑も残る。

イヴァン雷帝から送られた人がカザン・ハンに取り入って、皮を広げた分だけのカザンの土地を求めた。カザン・ハンはその者に許可状を与えた。モスクワ人は市場に行き、皮を全部買って、縫い合わせ一枚の大きな敷布を作ると、カザンで一番中心の一番すばらしい土地にそれを敷いて座った。ずっとそこを占拠したことにカザンの人々は怒ったが、その人は許可状を見せるだけであった。その後、その人を守るために大軍を率いてイヴァン雷帝がやってきた。好機到来と喜んで、ロシア人 *рус* たちはカザン全土を破壊したのだった。<sup>(42)</sup>

許可状さえあれば合法的であると居座り、そこを本拠に全カザンを破壊するロシア人の狡猾さが伝えられる。機知をもちいて「皮一枚の土地」を常識的でない広さの土地に変化させる方策は、ロシア人が先住民から土地を篡奪する際の典型的な手段として、テュルクの他の伝承にも残される。カザンの地を奪うのに「牛の皮一枚の土地」を利用することは、別の伝承にも次のように伝わる。

イヴァン雷帝はカザンをめぐってスウンビケと争い、疲弊したが落とせずいた。そこで一計を案じ、スウンビケに「牛の皮だけの大きさの土地をくれれば、これ以上戦いはしない」と告げた。彼女は考えに考えた挙句、「戦わないのなら、牛の皮だけの大きさの土地を取るがよい」と答えた。するとイヴァン雷帝はイデル川流域の大きな牛をもってこさせ、その皮を剥がせた。その皮を細いリボン状に切り裂かせ、長い縄にするとその縄で広大な土地を囲んだ。スウンビケが「なぜそんな広大な土地を取るのか」と怒ると、「私たちはただ牛の皮の分だけの土地をいただきました」といい、そこに現在のゾヤ<sup>(43)</sup>を建設した。スウンビケはこれに何もすることができなかった。<sup>(44)</sup>

スウンビケ (1516-54) はカザン・ハン国の最後の王妃である。口碑によると、イヴァン雷帝は彼女に恋い焦がれるものの、彼女に受け入れられなかったため、怒ってカザンを攻略

したという。王妃は敵の勝利を見る前に、モスクの塔から身を投げたと伝えられる<sup>(45)</sup>。その塔は、スユンビケ塔として現在でもカザンの町にそびえる。

1552年にカザン・ハン国を滅ぼしたイヴァン4世は、その勝利を記念して、聖堂を建てた。赤の広場にそびえる有名な聖ワシーリー大聖堂である。

### アストラハン征服

モスクワによる「牛の皮一枚の土地」をもちいた計略は、カスピ海北岸の町アストラハンを収奪するときにも用いられたと伝わる。カザフの伝説的な賢者で詩人のアサン・カイグはロシア側に立つハン<sup>(46)</sup>に向かって次のように語る。

アサン・カイグはハンにたいして立腹していた。なぜならば、ロシア人 орыс が「雄牛一頭の皮ほどの土地をくれ」といったときに、それを与えると、牛の皮を細い紐のように切り裂き、どれだけの土地を取っていったのかと憤っていたからだ。

あなたはアストラハンの町を建設した。

あなたはその土地をロシア人に征服させた。

あなたは私の気分を悪くさせた。

あなたは草原の湖に砂糖を注いだ。

あなたは砂糖の湖をずるいやつらであふれさせた。<sup>(47)</sup>

アストラハン（ハージ・タルハン）はジョチ裔のクチュク・ムハンマド（在位 1423-59）の所領であったが、1466年にその孫カスムがアストラハンで自立し、いわゆるアストラハン・ハン国を興した。この国の政権は不安定であり、ダルビッシュ・ハン（在位 1537-39, 54-56年）はモスクワ大公国に近づき、国内の反モスクワ派を弾圧した。カザン・ハン国と同様に当時のテュルク・モンゴル系諸勢力の内部でロシアをめぐるさまざまな立場が互いに競い合っていたことがわかる。

アストラハンにまつわる、別のアサン・カイグ伝承も伝わる。アストラハンの町を建てたハンが宴を三回開いたが、アサン・カイグは来なかった。その理由をアサン・カイグは「祝宴は適切ではない。カザフが利益を得るようになるには長い時間がかかる」と答えた。「閣下は、民の力をカザフの辺境に費やしたが、アストラハンの町はロシアの利益となっている」<sup>(48)</sup>。

1556年、ロシアはアストラハン・ハン国を滅ぼし、ヴォルガ川全域を手中に収めた。

### シベリア征服

「牛の皮一枚の土地」をもちいた収奪が行われたのは、カザンやアストラハンだけではない。シベリアを征服したコサックの頭目イェルマークについてのシベリア・タタール語の伝承にも「牛の皮一枚の土地」は現れる。イェルマークは、次のようにシベリア・ハン



国のクチュム・ハン（在位 1563-98 年）<sup>(49)</sup> を騙す。

クチュム・ハンはしばらくトボル<sup>(50)</sup> で過ごした。ロシアの地の皇帝から 3 人の盗賊が送られてきた。その頭領の名はイェルマークといった。このイェルマークがクチュム・ハンのところに来たが、彼の言葉を誰も解さず、ロシア人 *опык* たちもクチュムらの言葉を理解しなかった。やがて彼らはこの地の言葉を理解できるようになった。

イェルマークはハンに言った。「クチュム・ハンよ、私に牛一頭分の毛皮の土地をください」と。イェルマークはスルタンや家臣らを集めて協議した。家臣はこう言った。「牛一頭の毛皮の土地ならば大きくありません。その者に与えましょう」と。イェルマークは、牛一頭の毛皮を細い糸のように切り裂き、丸く囲い、広い土地を得た。

ハンの命令で家臣がその様子を報告した。「異教徒が広い土地を手に入れました」。ハンは「それくらいは広い土地でない。ここには広大な土地がある。争うな」といった。イェルマークは鋤や鋤で耕し、麦を蒔いた。ロシア人は去っていった。翌年、ロシア人がやって来て、麦を刈り取って、納屋を建てた。3 年目が来た。<sup>(51)</sup>

シベリア征服とその経営を担ったのは、「ビーフ・ストロガノフ」の料理名でも知られるストロガノフ家である。ストロガノフ家は、イヴァン雷帝からカマ川（ヴォルガ川支流。タタール語ではチュルマン川）上流の土地を所領として許され、特権をもち勢力を広げた。1574 年には西シベリアの地も下賜され、現地住民の意向を無視しながら、彼らを追い払ったり、貢納を課したりした。自分の領地を守り、先住民との摩擦を防ぐために私設の警備兵、とくにコサックを雇い入れていた。シベリア征服の「英雄」イェルマークはその頭目であったのである。別の伝承では、イェルマークがシビル・ハンに取り入り、3 年の準備ののちシビル・ハン国を滅ぼす経緯が述べられる。

かつてイェルマークはトボルに暮らしていた。（中略）彼はクチュム・ハンに一枚の毛皮分の大きさの土地を求めた。ハンは与えるよう命じた。同じ日、イェルマークは毛皮を細いリボンのように切った。それから地面に杭を打ち込み、リボンの端を杭に結びつけ、土地の一画を丸く測りとった。そしてその土地を手に入れ、そこに暮らしたのだった。そこに住んでいる時に、イェルマークは魚を釣り、盛大にハンをもてなした。

朝、ハンが起きると、家来に「この魚をもってまいれ」と命じた。その魚は兵士のように横たわっていた。ハンは「ロシア *Упык* がきつとこの地を手に入れるだろう」といった。やがて、イェルマークは姿を消し、どこへ行ったか誰も知る由もなかった。やがてヴァガイ川<sup>(52)</sup> に木っ端が流れ着いたが、どこからどうして流れてきたか、誰も知らなかった。3 年後、イェルマークが船に乗ってヴァガイ川からやってきた。船が来るのを見た。人々がそこに集まってきた。それを見て、「船が来たが、これは敵だ

ろうか、味方だろうか」と疑問に思った。船にはたくさんの人が乗っていた。(中略) 戦闘が始まった。軍装をして船に横たわっていたイェルマークが銃を撃つのを射手は見た。狙い合った二人は互いに射撃した。射手の矢はイェルマークに命中し、イェルマークの銃弾は射手に当たり、二人とも絶命した。このあとの戦闘でイェルマークの軍勢は勝利し、クチュムの人々は敗走した。ハンは民とともにイルティシュ川に逃れ、別の町へ去った。<sup>(53)</sup>

1582年10月のイルティシュ川の戦いのあと、クチュムは千人ほどの側近とともに逃げ、シビルはイェルマークに占領された<sup>(54)</sup>。伝承では射手が相打ちでイェルマークを殺害するが、シビル・ハン国はその後もロシアの攻撃を受けて、1598年に滅亡した。以後シベリアは徐々にしかし完全にロシアの支配下に置かれていく。シビル・ハン国の名は「シベリア」という言葉に残っている。

「牛の皮一枚の土地」の筋書きはテュルクのみならず、古くから世界各地に伝わる。「カルタゴの建国神話」にある女王ディドの伝説や『グリム童話』の「牡牛城を築くザクセン」、『メリュジーヌ物語』などが知られ、アジアでは、チベット、琉球諸島の宮古島、日本・京都(「藁一束の土地」)にも伝わる<sup>(55)</sup>。新しいところでは、中国吉林省延辺地域に伝わる「牛の皮一枚」という伝説がある。日本帝国が間島総領事館(1926年竣工)を建てるときに、日本側が細く切り出した牛の皮で土地を奪い、豪壮な高層建物を建てたと伝える。このほか、台湾ではオランダが、フィリピンではスペインが同様の手口で土地を詐取したと伝わる。この伝承は、実際にあった侵略に関連づけられている点で注目される。「牛の皮一枚の土地」はこのように各地に残るが、口承の話としてはまれに見いだされるだけであるという<sup>(56)</sup>。カザンやアストラハン、シベリアをロシアが「牛の皮一枚」で征服したという伝承は口碑であり、中央ユーラシアではこの話が口承で残っていたということは、この類話について考える際のヒントとなるであろう<sup>(57)</sup>。

16世紀中頃のノガイ・オルダも、カザン・ハン国のように親モスクワ派と親クリミア派とに分かれて、互いに覇権を争っていた。ノガイ・オルダの大オルダ<sup>(58)</sup>の支配者イスマイルは親モスクワ派の代表的な人物であった。イスマイルは、権力のためなら親族をも容赦なく殺す人物、「アンジ(狡猾な)・イスマイル」として知られ、ロシア史料によると1555年にライヴァルのユスフ(先に見たユスフと同一人物)を暗殺し、ビー(統治者)の位に就いた<sup>(59)</sup>。殺害されたユスフの子孫はノガイ・オルダ消滅後もロシアの貴族として、ロシア史にその名が刻まれた。親モスクワ派のイスマイルは多くの伝承でネガティブな人物像で描かれる。「イスマイルはハンとなったが、民に困窮をもたらした」、「(イスマイルは)カラサイを見ながら、怖気づき、足を草に引っ掛けて転んだ。草が一本体に刺さって、アンジ(イスマイル)は死んでしまった。(うつぶせのイスマイルを見て、カラサイは)『こいつは嘘つきだ。たくさんの陰謀を行った』と思い、殺そうと近づいたが、とっくに死んでいた」<sup>(60)</sup>。

テュルクの口頭伝承では、親ロシア派のイスマイルが悪漢として描かれ、それとは対照的に親クリミア派のカラサイらが数多くの叙事詩で英雄として歌われてきたのは注目すべき点である。

ノガイ・オルダの崩壊後、その民は、クリミア・ハン国やオスマン帝国へ移住したり、ロシア内部に組み込まれ、北カフカースに移ったり、カザフやカラカルパクに同化したり、と拡散した。ロシアでは、ノガイ・オルダの有力者は貴族として取り入れられ、歴史に大きな足跡を残した。1章でも触れたウルソフ家は、親モスクワ派であったイスマイルの子、ウルスを祖とする。1776年、ピョートル・ウルソフ公爵はモスクワにおける娯楽演劇の興行権を取得し、一座を結成した。現在でも世界的に有名なボリショイ劇場のはじまりである。イスマイルに暗殺されたユスフの一族は、ロシアでも屈指の名家ユスポフ家へと発展する。その富と財はロマノフ家を凌駕したともいわれる。その象徴ユスポフ宮殿（モイカ宮殿）において、ロマノフ朝末期に宮廷に入り込み、政策にも影響を及ぼした「怪僧」グレゴリー・ラスプーチンを殺害したのは、ユスフの子孫フェリクス・ユスポフ（1887-1967）であった。

ちなみに、驚くべきことに、チンギス・カンの子孫がロシア皇帝の位に就いたという史実がある。「そのとき（筆者注：1575年）、ツァーリのイヴァン・ワシリエヴィッチは、シメオン・ベクブラトヴィチ（改宗タタール人、カシモフ・ハン）にモスクワでツァーリの地位を授けて、戴冠させ、自分はただモスクワのイヴァンと称し、モスクワを去ってペトロフカに住んだ。ツァーリのすべての官吏をシメオンに渡し、自分はただの一貴族（ボヤール）として長柄をもって騎乗した」<sup>(61)</sup>。シメオンは本名をサイン・ブラトといい、ロシアに併合されていたカシモフ・ハン国の第10代ハン（在位1567-73年）であったが、正教に改宗したあとロシア皇帝となったのである。そして、雷帝イヴァン4世は翌年、皇帝シメオンから譲位を受け、あらためてツァーリに即位した。その真相について詳しくはわからないが、シメオンからの譲位には「チンギス統原理」が機能していると指摘される<sup>(62)</sup>。チンギス裔の皇帝から皇位を譲り受けることで、中央ユーラシアのテュルク・モンゴル系の人々を正統に統治する権利をもつことができたのである。この皇位継承は「ロシアが古くからステップの遊牧諸民族（のちにムスリム諸国家）と密接な関係をもち、ときにはステップの重要な構成部分でもあったことを示している。その意味で、モスクワ国家をモンゴル帝国の継承国家のひとつであったとみる立場もありえよう」<sup>(63)</sup>。

### 3. ロシアにたいする抵抗

雷帝の死（1584年）、リューリク朝の断絶（1598年）、「動乱」の時代を経て、1613年、ミハイル・ロマノフがツァーリに選出され、ロマノフ朝が成立する。ロシアの東方への拡張はさらに進み、1643年にはベーリング海峡にまで到達した。西方では、1667年にロシアはポーランドからウクライナを獲得する。ミハイルの即位に貢献したコサックはさまざま

まな特権を得たものの、17世紀後半になると締め付けが強まり、その不満が1670年のステンカ（スチェパン）・ラージンの一揆となって爆発した。西欧化政策を推し進めるピョートル1世は、ペテルブルグを建設し（1703年）、北方戦争でスウェーデンに勝利する（1721年）。最高行政機関の元老院はピョートルに「皇帝（インペラートル）」の称号を贈り、ロシア帝国が成立した。なお、ロシア正教会も、モスクワ総主教庁が廃され、宗務院（シノド）が創設されることで皇帝の統制下に入ることとなった。

東方の前線基地として、1735年からオレンブルグ要塞の建設が始まった。これに反対するバシュコルト人は反乱を起こすが、ロシア政府は彼らを弾圧する。オレンブルグ要塞は1743年に完成し、これ以後、オレンブルグはカザフ統治の最前線基地として機能することとなる。18世紀以降、ロシアはカザフ草原に次々と要塞を建設し、それらを結ぶ要塞線を南下させて領土拡大を進めていく。オレンブルグ要塞に反対する反乱の制圧後、ヤイク川はウラル川と改名され、この地での圧政が続くが、それにたいする抵抗運動が18世紀後半に頻発した。ウラル・コサックの乱（1772年）やプガチョフの農民反乱（1773年）がその代表的な蜂起である。ロシア史における最大の農民反乱とされるプガチョフの乱について、バシュコルトの伝承は次のように述べる。

皇帝ペテルは本当の皇帝ではなかった。彼自身は我らのように農民であった。彼を民衆だけが皇帝と認めていた。クズカラタウで戦闘があった。この山には、婆帝の軍隊が駐屯していた。その軍隊と皇帝ペテルの軍隊が対峙した。婆帝と皇帝ペテルの戦いは、ウラル山で、クルグズ<sup>(64)</sup>の国で、ウファとオレンブルグ近郊で行われた。ペテル軍は婆帝軍をこの山に追いやった。<sup>(65)</sup>

「ペテル」とはプガチョフが僭称した「ピョートル3世」のことで、「婆帝」はエカチェリーナ2世を指す。人々は「ピョートル3世」が偽者であることは知っていたが、コサックもバシュコルトも自分たちのために彼を利用したのであった。バシュコルト人サラワトもプガチョフとともに戦った「英雄」である。

サラワトは戦いととも、工場主との争いととも  
プガチョフがやってきたら、皇帝の側につくタルハン<sup>(66)</sup>を  
貴族たちを驚かせ、近くの工場の持ち主を脅しつけた。  
すべてをその手に入れたのは、彼である。<sup>(67)</sup>

（サラワトを）皇帝の軍隊が包囲した。  
馬に乗ることができずにサラワトは、  
500の騎兵がやってきても、彼を取り囲んだとしても  
手を胸の上に組むことはなかった。

矢筒が尽きて刀が欠けるまで、気を失って倒れるまで、300の兵を破った。  
まもなく勇者サラワトは捕らえられた。手足に鉄の枷をはめられて。<sup>(68)</sup>

反乱軍はエカチェリーナ2世の「夫」であるグリゴリー・ポチョムキンによって鎮圧された。プガチョフは1775年にモスクワで処刑され、またサラワトは終身強制労働が命じられ、1800年に死亡した。反乱平定後の1775年に、地方行政を強化するために複数の県を束ねる総督府がロシア全土に設置された。陸軍省の管轄にある総督府はやがて、トルキスタン総督府（1867年）、ステップ総督府（1882年）など「辺境」統治に特化するようになった。ロシアの長年の宿敵であったクリミア・ハン国は1783年、ポチョムキンの侵攻を受け、ロシアに併合された。

ロシア領域外の草原地域に目を向けてみよう。カザフはモンゴル系ジュンガルの侵攻を受けるなかで、ロシアとの関係を深めていった。1731年にカザフの小ジュズ<sup>(69)</sup>のハン、アブルハイルがロシア臣籍を宣誓すると、他のカザフの有力者たちもロシアに従うようになった。これ以降、カザフ草原は徐々にロシアに組み込まれていくことになる。中ジュズのアブライ・ハン（在位1771-1781）、ワリ・ハン（在位1781-1819）父子は清朝とロシアに二重朝貢を行うことで、カザフの独立を保とうと努めたが、アブライの死後、カザフ・ハン国のまとまりはさらに崩れていき、ロシアの介入を招くようになった。それでも、アブライの治世を歌う叙事詩では、まだロシアは「敵」として描かれていない。それどころか次のカザフの伝承のように、ロシアとの関係を深めようとするアブライ・ハンの姿がある。

ロシアへ息子トグムを使者として、交誼を求めて送った。  
双方が商業を行おうとしていた。<sup>(70)</sup>

先に見たオレンブルグ要塞の性格も、カザフの叙事詩では交易地点としての側面が強調されている。

国境のオルンボル（オレンブルグ）に小ジュズが交易する場所があった。<sup>(71)</sup>  
ロシアの国境オルンボルで、  
ウルゲンチで、多くの人々が商業を行うだろう。<sup>(72)</sup>

さらに、ロシアとは戦わぬようにアブライを諫める側近の賢者ブカル・ジュラウの「ロシアと戦って、閣下を慕う民衆に敵意を抱かせますな」<sup>(73)</sup>との言葉からもアブライの治世にロシアを敵とすることはなかったことがわかる。

カザフの著名な勇者ラユムベクの父ハンゲルディは、カルマク（ジュンガル）の攻撃に抗するために、女帝アンナ・イヴァノヴナ（在位1730-40年）に助力を乞う。「（ハンゲルディは）父は大ジュズの有名なコダル・ビー、トレ・ビー、勇者サタイや勇者ボレクとともに、

ロシアの女王アンナ・イオアノフナ（イヴァノヴナ）に使者を送り、ロシアの支配下に入ることを請うた」<sup>(74)</sup>。また18世紀、ジャユク（ウラル）の東部に住んでいたエセンケルディなるバイ（富者）は「ロシア語の読み書きができた。ペテルブルグに旅をした。毎年女帝に200頭の馬を贈っていた」<sup>(75)</sup>。

1819年にワリ・ハンが死ぬと、ロシアはそれまでカザフ社会を統率していたハンの位を廃止した<sup>(76)</sup>。15世紀から続いたカザフ・ハンによる統治はこうして終わったのである。カザフ人は1822年の「シベリア・キルギスに関する規約」によって西シベリア総督府の管轄下に「異族人」として入ることになった。ロシアの植民地統治が進む一方で、これを快く思わない者たちはロシアにたいする抵抗運動をはじめた。その代表例は、アブライ・ハンの孫たち、サルジャン、ナウルズバイ、ケネサルらの抵抗運動である。1832年、コサック部隊の攻撃を受けたサルジャンらはコーカンド・ハン国へ逃れる。当地の軍事司令官（ベクテルベク）は「ロシアへの恨みをもち、古い敵意が凍てつく心にあった」「以前からロシアへの恨みと敵意をもっていた」<sup>(77)</sup>。彼は次のようにアブライの孫たちを激励する。

私は軍を率いるベクテルベク、アクメシト<sup>(78)</sup>を取らんと出陣した。

貴君らはアブライの子孫であり、敬意を払わずにはおれない。

のどが渇き砂塵を駆けるスルタンたちよ、われらのタシュケントを本拠とせよ、

サルト<sup>(79)</sup>、クルグズ、カザフから軍を集めて、ロシアを攻めておまえは仇を取るのだ。<sup>(80)</sup>

反ロシア闘争の象徴的な存在であるケネサルは、アクタウ要塞やペトロバヴロフスク要塞への攻撃を行うなど、1837年からロシアにたいする反乱を展開する。ケネサルは1841年にハン即位を宣し、45年ころまでロシアへの攻撃を行ったが、47年にクルグズによって殺害された。ケネサルの死後、ロシアへの抵抗運動は息子サドックが引き継ぎ、1870年頃まで抵抗を続けるが鎮圧され、以後カザフはロシアの完全な支配下に置かれることになる。チンギス裔の指導者がロシアへの抵抗運動を行ったことは、中央ユーラシアの歴史を考えるうえで、改めて注意したい。

多くの中央アジアの英雄叙事詩の敵として頻出するモンゴル系のカルマク（ジュンガル）に替わってロシアが敵となったことは次のカザフの伝承が明示している。

カルマクよりもロシアが敵となって増え、近づいてきて町を広げた。

夏営地を、冬営地を、草原を、縄を広げて測定した。<sup>(81)</sup>

ここで歌われる、土地の測定のための縄は、先に触れた「牛の皮一枚の土地」を収奪するための細い草紐に重なったかもしれない。

ケネサルらの反乱が起きたころ、カザフ草原西部でも武装蜂起があった。ロシアの傀儡

国家であるボケイ・オルダ（ボケイ・ハン国）の第3代ハン、ジャンギル（在位1824-45年）にたいする反乱である。ヴォルガ川・ウラル川間の草原地帯にいたモンゴル系トルグート（カルムイク）が東トルキスタンへ移住すると、1801年、その「跡地」にボケイ・オルダが建てられた。ジャンギルの政策は民衆の不興を買い、1836年に勇者イサタイ・タイマンウルと詩人マハンベト・オテミスウルが率いる反乱へとつながったのである。カザフの叙事詩の次の言葉から、ハンとロシアとのつながりがわかる。

ハンの使者が来たときに、マハンベトはイサタイに言った。

「これらをみな殺して、その頭を斬りましょう。

この者どもは我らを騙している。ロシア *орыс* に知らせを送っている。

ロシアから援軍を来させるように、欺いている。（中略）

勇者よ、私の言うことを聞かなければ、

長のバルク<sup>(82)</sup>の血を流し、白い生贄のように屠殺しなければ、

ハンとロシアが団結すれば、敵の目標になると知れ！」<sup>(83)</sup>

だが、1838年にロシアの反撃を受け、反乱は平定され、ボケイ・オルダ自体も1849年にロシアに併合されることで消滅した。

#### 4. ロシアの支配のもとで

1853年から56年まで続いたクリミア戦争により黒海は中立化し、さらに1877年の露土戦争の結果、バルカン半島でのロシアの勢力は拡大した。カフカースでは、対ロシア抵抗運動を率いたシャミーリが1859年に投降し、ついで1864年には北西カフカースのチェルケス諸部族が制圧された。さらにイギリスに対抗するなか、ロシアは1864年以降、中央アジアへ本格的に進出し始める。1865年にタシュケントを占領すると、68年にブハラ・アミール国を、73年にはヒヴァ・ハン国を保護国（属国）とした。また1876年にコーカンド・ハン国を滅ぼして、ロシア領とした。さらにトルクメンも1885年までに平定され、西トルキスタンはロシアの支配下に入ったのである。このころから「異族人」支配の過程で、多くの口頭伝承が記録され、出版されるようになった<sup>(84)</sup>。

ロシア支配下の中央アジアではロシアとの単純な対立構造にあったのではなく、ロシアの先進性を認め、それを積極的に取り入れようとする動きもあった。一例をあげると、カザフの「近代文学の父」アバイ・クナンバイウル（1845-1904）はこのように書く。「ロシア語を学ぶべきだ。英知も富も技術も学問もすべてロシアにある。」「ロシアの言葉を知れば、視野がより広がる。」「ロシアの科学・技術は世界への鍵だ。それを知ることによって世界は容易に手に入る。」<sup>(85)</sup>

また、ロシアの中央アジア併合・征服の過程では、現地の人々がロシアに協力・貢献する

こともあった。たとえばヒヴァ・ハン国の圧政に反発したシル川流域のカザフ人は、ロシアの援助を望み、ロシア軍の到来を歓迎した。コーカンド・ハン国やヒヴァ・ハン国と戦っていたカザフの勇者ジャンコジャ（1774-1860）は、トルキスタンの植民地化の嚆矢となる、ロシアのラユム（ライム）要塞の建設にも反対せず、ロシアとともにヒヴァ・ハン国軍と戦った。そこにはカザフとロシアとの「友情」さえも芽生えた。しかし、ロシアがカザフ人に増税や財産没収を課し、カザフ人を豊かな土地から追放するようになると、ジャンコジャはロシアにたいして蜂起する。ジャンコジャの奮闘もむなしく、反乱は抑えられ、ジャンコジャは銃殺された。

ジャユク（ウラル川）のあらゆる方面から、言葉のわからぬ人々が通り過ぎた。

ロシア орыс という多くの民が馬車を引いた。（中略）

ヌルマンベトの息子ジャンコジャは、轟く庇護者であった。

怒りの黒い槍で異教徒を何度も突き刺した。

ジャンコジャは毎日ロシアを怒らせた。

ラユムという要塞からコサックがみな集まって、一方向から対峙した。

大佐 полковник は命令 команда を下し、ジャンコジャを狙った。

500人の兵士が撃ったとき、大軍が襲来したとき、

勇者ジャンコジャは目を吊り上げて、眉をしかめた。

むき身の剣を手にとって、柄から血を流した。

ロシア人を17人殺し、逃さなかった。勇者は怒りに満ち溢れた。

馬を失ったジャンコジャをロシア人が取り囲む。<sup>(86)</sup>

このカザフの伝承ではロシア語の「大佐」や「命令」が使われている。先に見たように、ロシア語に入ったテュルク語は数多いが、テュルク語に入ったロシア語（スラヴ語）はほとんどなかった。だがロシアとの関係が深まるにつれて、「『ありがとう спасибо、コサックよ！』と行って去った」、「ロシア皇帝の将校 офицер はケネサルのこの提案を……」、「ロシアの兵士 солдат らをとらえて……」<sup>(87)</sup> など、ロシア語の語彙も中央アジアの口碑にあらわれるようになる。現在、中央ユーラシアのテュルク諸語には非常に多くのロシア語からの借用語が見られるが、それはこのように19世紀以降になってからのことである。

20世紀にはいると、日露戦争（1904年）、第一次ロシア革命（1905年）、ストルィピンの反動政治（1906年）、第一次世界大戦（1914年）など、ロシア帝国では大きな変動が続く。1916年に中央アジアとその周辺の広範な地域で起こった大規模な反乱はロシアの植民地における革命に先鞭をつけた。長期化する第一次世界大戦は総力戦となり、その影響はロシアの植民地にも及ぶ。「異族人」である中央アジアの人々は兵役が免除されていたが、1916年6月25日に発令された徴用令によりカフカース地方からトルキスタン地方、ステ



ップ地方、シベリア諸州の「異族人」にたいして、19～43歳の男性に後方徴用が課せられた。カザフのアクン(詩人)トレウは「6月25日に勅令が出た。勅令を聞いて意識を失った。三日以内に集まるようにとの命令があった。これ以上どんな苦しみがあるだろう」<sup>(88)</sup>と嘆く。ボザユル・アクンは「カザフを売って利益を得た。ロシア語を知るお利口さんが」<sup>(89)</sup>と皮肉る。この年の夏から秋にかけて、人々は徴用に抵抗し、トルガイ州やセミレチエ州では激しい武装闘争へと発展した。反乱はロシア支配にたいする「反ロシア」的な性格を帯びていた。プザウバクは、1916年のロシア政府の状況をこのように歌った。

われらの皇帝ニコライ<sup>(90)</sup>の幸は去った。傲慢さと威厳を失って。  
自分の内外の敵は増え、その目に敵が映ると色を失った<sup>(91)</sup>。

バツタル・アクンは次のように「1916年」を刻む。

自分は貧しくなろうとも、肉体は生きている。  
心の汚れが晴れるといえようか?!  
1916年、ニコライが勅令を出した年。<sup>(92)</sup>

翌1917年に十月革命が起り、ソビエト時代になると、ロシアと戦う口碑が伝えられたり、新たに創られたりすることはほとんどなくなっていく。その背景にはもちろん、口頭伝承という「メディア」自体が近代化の中で衰退していったことがあるが、ソビエト政権が、ロシアと戦った英雄たちを歌う叙事詩を弾圧・否定していったからである。モスクワを攻撃したエディゲについて伝える英雄叙事詩は、ソ連共産党中央委員会に、封建君主で「ロシア民族の敵」でもあるエディゲをタタール民族の英雄として描いていると批判され、ロシアのカザン侵略を描く『チョラ・バトゥル』はテキストの閲覧や複写、出版が禁止され、弾圧された。また反ロシア闘争を行ったケネサルを「進歩的民族解放運動」と評価した歴史家ベクマハノフは「ブルジョア民族主義的概念の虜」で封建君主の運動を理想化すべきでないとして批判された。批判を免れ、出版が許された叙事詩のテキストであっても「長兄」たるロシアをあからさまに敵とすることは認められなかった。先に取り上げたイサタイとマハンベトの口碑においても、ソビエト時代に出版されたテキストでは「ロシア орыс」は「皇帝 патша」や「町 қала」といった表現に置き換えられた。ロシアを敵と見なすことは禁忌され、直接的に「ロシア」を明示することは避けられたのである。本稿で取り上げたテキストには近年になってようやく刊行されたものが少なくない。

## おわりに

中央ユーラシアのテュルクの口碑では、ロシアは戦うべき「敵」として現れる。その背

景には、ロシアのカザン征服にはじまる領土拡張や異民族支配があった。だが、ロシアは「敵」とすると同時に、共通する文化をもって共存する仲間でもあった。現在でもその存在は大きい。ロシアにとってもテュルクの存在は小さくないはずである。ウクライナを侵略しているロシアは一面的に「ロシア」として理解されるが、ロシア国防大臣のショイグーはトゥバ人であり（母親はロシア人）、また、シベリア地方をはじめロシア全土から、テュルク系をはじめとするさまざまな非ロシア人が侵略戦争に加担し、あるいはさせられている。ロシア自体、非ロシア的なるものを内包し、またロシアを「敵」としてきた人々もロシアに含まれ得るという事実を再認識する必要がある。

ロシアと戦った勇者は多い。今もロシアと戦っている人たちがいる。今後、本稿で取り上げたチョラ・バトゥルやケネサルらが、再び同じ文脈で象徴的なヒーローとして現実世界に蘇ることのないよう望むばかりである。

#### — 注

- (1) 本稿ではロシアという語を、地理的空間、国家・政体、民族として文脈に応じて適宜用いる。
- (2) クリミア共和国、ドネツク共和国、ルガンスク共和国は含まない。
- (3) 君主の称号カガンは、古くは鮮卑の拓跋が「可寒」の称号を使っており、のちにカアンやカン／ハンなどとなった。カアンとカンは併存したり、区別されたりした。
- (4) 小松久男編著『テュルクを知るための61章』明石書店、235-236頁。
- (5) イブン・ファドラーン著、家島彦一訳注『ヴォルガ・ブルガール旅行記』平凡社東洋文庫、258-260頁。
- (6) 『オグズ・カガン説話』では、テュルクの部族連合オグズの伝説的始祖オグズ・カガンがロシアを攻めると、ロシア公の息子が「あなたは私のカガンです。あなたに私の頭と幸を捧げます」といったと伝わる。これはモンゴルの侵攻をオグズ・カガンに映したものであろう。Oğuz Kağan Destanı, W.Bang, G.R.Rahmeti, 1936, İstanbul, 20-22.
- (7) カザフ草原や南ロシア草原に広がっていたテュルク系集団。その領域はキプチャク草原と呼ばれ、ジョチ・ウルスの通称名「キプチャク・ハン国」もこれに由来する。
- (8) チンギス・カンの統一したモンゴル自体、ナイマンやオングトなどテュルク系の遊牧集団を含んだテュルク・モンゴル系の集団であった。モンゴル高原はもともと突厥や回鶻などのテュルクの遊牧国家の本拠地であったが、モンゴル帝国の拡大によりテュルク系集団はもとの住居地を追われて各地に移住し、テュルク世界が拡大した。
- (9) Шипова Е.Н., *Словарь тюркизмов в русском языке*, Алма Ата, 1976.
- (10) Там 323.
- (11) Баскаков Н. А., *Русские фамилии тюркского происхождения*, Москва, 1979, 156.
- (12) Там 93, 202.
- (13) Лицо русской национальности, Журнал "Коммерсантъ Власть" 2005.09.26.  
<https://www.kommersant.ru/doc/611986> (閲覧日:2022年10月25日)
- (14) Баскаков 1979, 71, 142, 178, 131.
- (15) 中村泰三「地名からみたロシア」『史窓』63号、京都女子大学、2006年、66-67頁。
- (16) Ulrich Morgenstern, Debating "national ownership" of musical instruments: the balalaika as a subject of ethno-political discourse, Reiza Sultanova and Megan Rancier (ed.), *Turkic Soundscapes: From Shamanic Voices to Hip-hop*, SOAS Musicology Series, 2018.
- (17) *Словарь Академии Российской. Ч. 1. от А до Г*, при Императорской Академии наук, 1789, Санкт-Петербург.

- (18) 柚木かおり『民族楽器バラライカ』東洋書店、6頁。ロシアの民衆にこの楽器が広がったのは18世紀末のことであったという。なおバラライカは19世紀後半にアンドレーエフらによって現在の形状に「改良」された。
- (19) 拙稿「水辺の異形」『和光大学表現学部紀要』21号、2021年。
- (20) テュルク・モンゴル系の言葉には現在でもテュルク系のバトゥル *батыр* やモンゴル系のバートル *баатар* などが使われている。モンゴル国の首都ウラン・バートルは「赤い英雄」の意である。
- (21) *ПСРЛ. Т. 2. Ипатьевская летопись*. СПб., 1908. Стлб. 339.
- (22) 石黒寛「“モスクワ”の語源について」『東海大学紀要』4号、外国語教育センター、1983年、65頁。
- (23) 田中陽兒他編『世界歴史大系ロシア史1』山川出版社、1995年、169頁。
- (24) 栗生沢猛夫『タタールのくびき』東京大学出版会、72頁、80頁。
- (25) Греков Б.Д., Якубовский А. Ю., *Золотая Орда и её падение, Москва*, 1950, 246.
- (26) 近年では、タタールの語を避け、「モンゴルのくびき」とされることもある。
- (27) 田中 1995年、202頁。
- (28) 下斗米伸夫編著『ロシアの歴史を知るための50章』明石書店、2016年、33頁。
- (29) 濱本真実『「聖なるロシア」のイスラーム』東京大学出版会、2009年、38頁。
- (30) Ischboldin, Boris, *Essays on Tatar History*, New Delhi, 1963, 73-74.
- (31) *Посольские книги по связям России с ногайской ордой 1489-1549гг.*, Махачкала, 1995, С.306-307.
- (32) ツァーリという語は、最初ビザンツ皇帝を指していたが、モンゴル侵入後は「キプチャク・ハン」も指すようになった。田中 1995年、207頁。
- (33) 下斗米 2016年、75頁。
- (34) 田中 1995年、234頁。
- (35) Диваев, Эбубәкір, *Тарту*, Алматы, 1992, 84.
- (36) この *Qazaq* (コサック) は既述のようにロシアを指す。以下のテキスト引用では、ロシアを原語でどのように表記しているかを「ロシア」の語の後に記す。
- (37) Is'haki, Saadet, *Çora Batır: Eine legend in Dobrudshatarischer Mundart*, Kraków, 1935, 14.
- (38) Диваев 1992, 84.
- (39) *Татар халык иҗсаты: Дастаннар*, Казан, 1984, 119.
- (40) クリミア・タタール人はクリミア半島に居住するテュルク系民族で、1783年にロシア帝国に併合されたクリミア・ハン国の主要な住民であった。クリミア・ハン国はオスマン帝国の保護国であり、両国は密接な関係にあった。彼らは、第二次世界大戦中には、スターリンによって、強制的にこの地を追い払われた。のちに帰還運動の結果、25万のクリミア・タタール人が帰還を果たしている。2014年にロシアに併合されたクリミア地方はテュルクの地であった。
- (41) *Кърымтатар халкъ агъыз яратыджылыгы хрестоматия*, Тошкент, 1991, 72.
- (42) *Татар халык риваятьләре һәм легендалары*, Казан, 2000, 57-58.
- (43) スヴィヤシユク。1551年にイヴァン雷帝がヴォルガ川の中州に立てた要塞で、1552年のカザン攻略に貢献した。
- (44) *Татар халык... 2000*, 58.
- (45) Шунда ук 58.
- (46) このハンはカザフ・ハン国の創始者であるジャニベクである。アストラハン・ハン国の三代目のハンはジャニベクというが、アサン・カイグはジャニベクに忠言する人物という設定で口碑に伝わる人物であるため、このジャニベクはアストラハン・ハン国ではなくカザフ・ハン国のハンと設定されているのだろう。
- (47) *Бабалар сөзі 85*, Астана, 2012, 184.
- (48) Сонда 157.
- (49) クチュムはイヴァン雷帝に贈り物と祝辞を送ったイエディゲルとベクブラトを退位させて殺し、自らシビル・ハンになり、1572年に侵入してくるロシア人を攻撃することにした。

- (50) 現ロシア連邦チュメニ州の町。
- (51) Юсупов Ф.Ю., *Сибирские татары из сокровищницы духовной культуры* 3. Казан. 2017, 469-470.
- (52) イルティシュ川支流。現在のロシア共和国チュメニ州を流れる。
- (53) Юсупов 2017, 489-490.
- (54) ジェームス・フォーシス著、森本和男訳『シベリア先住民の歴史』彩流社、1998年、47-48頁。
- (55) 斧原孝守「東アジアにおける「牛の皮一枚の土地」『東洋史訪』3、1997年、80-91頁。
- (56) ステイス・トンプソン著、荒木博之、石原綏代訳『民間説話』八坂書房、2013年、184頁。
- (57) 金正雄、王書玮「中国朝鮮族民間説話におけるカルタゴ建国神話の受容と変容」『東アジア日本語教育・日本文化研究』第22巻、東アジア日本語教育・日本文化研究学会、2019年、369-385頁
- (58) 16世紀後半、ノガイ・オルダは大オルダ、小オルダなどいくつかの勢力が分立していた。
- (59) *Полное Собрание Русских Летописей Т.13*, Санкт-Петербург, 1904, 249.
- (60) *Бабалар сөзі 46*, Астана, 2008, 210.
- (61) Соловьев С. М., *История России с древнейших времен. Т.6.*, 1896, 180.
- (62) これには異論もある。栗生沢猛夫「『胚胎期』ロシアにおける「統治理念」」『北東アジア研究別冊』2017年、70頁
- (63) 田中 1995年、262頁
- (64) カザフのこと。
- (65) *Башкорт халык ижады Т.2*, Өфө, 1997, 205.
- (66) 免税特権を有する身分。
- (67) *Башкорт халык ижады Т.5*, Өфө, 2000, 285.
- (68) Шунда ук 287-8.
- (69) ジュズとは、カザフ社会を構成する「部族連合」。大中小の3つのジュズがある。
- (70) *Абылай Хан*, Алматы, 1993, 121.
- (71) Сонда 121.
- (72) Сонда 113.
- (73) Бұқар жырау Қалқаманұлы, *Шығармалары*, 1992, Алматы, 21.
- (74) *Бабалар сөзі 87*, Астана, 2012, 153.
- (75) Сонда 62.
- (76) 1822年に中ジュズ、1824年に小ジュズのハン制が廃止された。
- (77) *Бабалар сөзі 29*, Астана, 2006, 256-257.
- (78) 現在のクズルオルダ。
- (79) 現在のウズベクにあたる。
- (80) *Бабалар сөзі 29, 292*. もっとも、この人物はすぐに裏切り、サルジャンらを処刑する。
- (81) Сонда 246.
- (82) ジャンギル・ハンの評議員バルク・クダイベルゲノフのこと。
- (83) *Исатай - Махамбет*, Алматы, 1991, 116.
- (84) これらの作業は現地の知識人など非ロシア人によっても行われ、自らの文化を再認識し、民族文化の支柱として「民族形成」に寄与することにもなった。ソビエト時代・諸共和国の独立を経て、現在まで口頭伝承資料の公刊と研究は進んできた。
- (85) *Абай Қара сөз, поэмалар*, Алматы, 1993, 51.
- (86) *Бабалар сөзі 62*, Астана, 2010, 44-45.
- (87) *Бабалар сөзі 88*, Астана, 2012, 263-264, 267.
- (88) Кенжебаев Б., Шаменов К., *1916 жылғы көтеріліс жырлары*, Алматы, 1958, 103.
- (89) Сонда 91.
- (90) ロマノフ朝最後の皇帝ニコライ 2世。十月革命で処刑された。
- (91) Кенжебаев 1958, 108.
- (92) Сонда 113.